

画家アンソニー・ヴァン・ダイク

ザビエルを歓迎する宗麟を描く



大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

16世紀は、人類史上初めて「世界史」と呼べるような、地球的規模でのダイナミックな人間関係が生まれた世紀です。地球を逆回りしてアジアで出会ったイベリア半島西国（ポルトガルとスペイン）の活動により、ユーラシア東端にある日本の状況

も、さまざまな手法で彼らの本国に伝えられました。

では、その世紀の日本社会をリードした「戦国大名」の存在は、ヨーロッパにどのように伝えられたのでしょうか。私がこれまで調査した、ヨーロッパでの戦国大名の史料で、最も多

くの遺物を確認できたのは、天下統一に貢献した織田信長や豊臣秀吉、徳川家康など日本史上で著名で、評価の高い人物ではありません。それは「Coninck van Bvngo」（豊後王）と表記される、九州の大名大友義鎮（宗麟）です。例えば、ドイツ南部のバイエルン州に、ボンマースフェルデンという人口3千人余りの小さな町があります。18世紀初頭、マインツ選帝侯でバンベルク司教のロタール・フランツ・フォン・シェーンボルンが、この町にヴァイセンシュタイン城を造営し、その宮廷内を多くの絵画で飾りました。シェーンボルン伯爵コレクションと称されるその絵画群の中に、17世紀フランスの画家アンソニー・ヴァン・ダイク（1599～1641年）が描いた、「2人の人物の出会い」をテーマにした作品（写

アンソニー・ヴァン・ダイクが描いた大友義鎮（宗麟）とフランシスコ・ザビエルの出会いの場面（ヴァイセンシュタイン城、ドイツ）

真）があります。

画面左側の白いアルパを着たひげの人物はフランシスコ・ザビエル。彼は身をかがめて両手を広げ、壇上の面会者を敬意のまなざしで見上げています。一方、右側の王冠の人物は、壇上から歩み寄り、右手を差し出してザビエルを迎え入れるかのよう

に歓迎しています。

美術史家の木村三郎氏は、美術館の目録がザビエルの面会者を「Kaiser von Japanien」（日本の王）としていること。そして、壇上の王が立ち上がってザビエルを「強い情念を抱きつつ迎えている」様子が、フェルナン・メンダス・ピント「東洋遍歴記」の「座っていた場所から五、六歩踏み出してきて彼を迎えた」と記す「豊後大名が、ザビエル師に示した敬意」の記事に一致することから、「作品は、ザビエルを歓迎する大友宗麟を描いたもの」と結論しています（木村三郎「ヴァン・ダイク作、通称『日本の王に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル』について」。

（名古屋学院大学国際文化学部学部長・教授）

11月1回掲載